

大講堂

一

聴講生三百人といわれる俊範上人の講義が終った直後の叡山の犬講堂の中は、今までの静けさを破つて、急に騒然たるものがあつた。

「ああ、上人の講義もよいが、退屈だよ、毎日毎日科文の筆写だけじゃ、くさくさする」

「馬鹿なことを言うな、老僧がわれわれをあかすまいと、しやれなぞ使つての講義振りありがたいと思わぬか」

まだ講義の写し残りを、筆記しておるらしく、机に向つておるのがどなり返えた。

「お主のような紙魚の徒輩は黙っておれ、大体が仏の教えは生きておる人間を相手にしての教えの筈じゃ、だから聴いておつて面白いのが当然だ、それが眠くなつても一向に面白くはない。これは誰の罪か知つておるか、それはなあ、お主のような学者という徒輩が、科文や科註などとい

う厄介なものをでっち上げ、経文にもないようなむずかしい熟字を考案してわれわれを苦しめるとともに一向に興味のないものにしてしまったんだ。経文よりも解釈の方がむずかしいというへんてこなことが、平気で横行しておるんだぞ」

講義を終了した俊範上人が大講堂から姿を消すが早いのか、いの一歩に、筆硯をかたづけ始めた学僧の一人が、大講堂の天井にこだまするような声で言い放った。

「はは……面白い理窟もあるもんじゃな」と、筆記の整理をしておる他の学僧がそれに応じた。

「そんな怠け坊主は大乗の器物ではないぞ、由緒あるこの叡山の講堂の席が汚れるわ、そんな坊主は小乗の經典でも読んでおれ、自坊に寝ころんで四分律でも読んだがよい。面白い經典ならいくらでもあるわ、しかしそれはなあ、子供にきかせるお伽噺だ。大人になっても、黙っておとぎばなしが聞いておれるか……まあ智能の問題じゃなあ、高い智性を磨くには高遠な哲理がいるのじゃ、自己の智性の低さを忘却して、深遠な哲理を嘲笑する、それが伝統を誇る叡山の学僧がとるべき態度か……」

「相変らず悟ったようなことをぬかす……東塔の学僧弁達一問ゆくぞ」

弁達と自ら名乗った学僧はきつと大講堂の一座を睨み廻わした。これは、常々俊範上人の講義が七六か敷いと、講義が終わる度毎にど鳴り散らしておる学僧であった。

「よろしい、西塔の学僧信海返答をいたそう、何んなりと問え」

稲妻のような殺気が、大講堂のうちを圧した。筆硯を書籍の上に載せて、机の上を整理した信海が、やおら弁達の顔をにらみつけた。

大講堂三百人の学僧達も今は銘々の私語をやめて、弁達、信海の一問一答に耳を傾むけ始めた。静まった四辺の中に、今は仏前の燈明のみが、いそがしくまたたいている。

「仏の教は誰が為にあるのか、先づ答えよ」

「一切衆生の為……」

「ようし、その一切衆生は皆高き智性を有するか」

「無論、智性は等しからず、高きも低きもあるわ」

「しからば、たつた今、高き智性を磨くためには、深遠なる哲理を要するとの貴公の言葉は、矛盾だぞ」

「何故、言葉自体には矛盾は毛頭ない」

「言葉には無い、しかし一切衆生と関連させれば、大きな矛盾が生れてくるぞ、智者は少なく愚者は多いのが一切衆生だ。仏の教が深遠なる哲理とすれば、少数の智者のみ救って、大多数の愚者は救われない道理ではないか、仏の教えは、そんなへんばなものか、信海どうじゃ……」

「弁達、叡山の樹木はもとから大木か……否、叡山には大木と小木と、いづれが多いか、如何ん……」

「勿論、小木が多い」

「小木は大木にならんものかなあ」

「論題の的をはずして、何を聞きおるか、信海参つたと言え」

「小木は天の三光風雨、山の生氣によつて、何時となく大木となる。小木は小木に何時迄もどまるものではない、大木になることが樹木本来の念願であり、生命の赴むく処だ。天の三光山の嵐気よりいえば、みな等しく山の樹木であつて、いずれの処に樹木の大小があろう、即ち、仏の慈眼よりみれば智者も愚者もないわ、聖愚ともに救おうとするところに深遠なる哲理が要るのじや、智者を智者として救い愚者を愚者とたばらかして救おうとするならば、左程むずかしいことは要らぬ。この有智無智ともにあるのが一切衆生であり、その一切衆生をみな等しく救おうとするところに、大乘の深遠なる哲理が存在するのだ、どうじや、弁達参つたと言え……」

どつという、きよう笑が学僧の口から上つた。それは弁達参つたといえという修海の口調が、先刻の弁達の口調をまねたので思わず一同が笑つたのであるが、弁達は己の所論が笑われたものと誤解して、かつとなつて一段と大きな声でど鳴り上げた。

「大乘の深遠なる哲理などと、思い上つた気持でおるから、この叡山独りとり残されて行くのじや。信海、汝の居る西塔では京の街が見えんから、そんなのん気なことを言っておられるのだ。四明嶽に立つて、夜の京の街の灯を一度眺めてみるがいい。其処には、人が生きておるんだぞ、

金が欲しい、食い物が欲しい、女が欲しい、という人間がうようよ生きておるんだぞ。誰も智者になろうなどと願うものは其処には一人もおらんのだ。その中に立つて汝のいう所の高遠な仏教の哲理という奴を説いてみる、誰が耳を傾けるか、恐らく一人もおるまい。叡山の山頂に諸法実相を観じて、一心三觀の月をみておると自惚れておる坊主などは、京の街では一日でも生かしておいてくれぬ生きた人間が棲んでおるのだ。汝の頭の裡には、所謂、昔の高徳の僧侶、昔の学者、そんな連中の言葉だけが一杯に詰っていて、何にかと言えば、その連中の言葉を借用して威厳をつけたような、珍文漢文の法門をまくしたてておるが、それでは生きた人間は救えぬのだ、死んでしまった人の言葉のみで生きた人間が救えるとも思っておるのか。みよ、みよ、われわれが叡山のみを仏教の最高の学府として誇っておる時、京の街では、天台法華宗をくさす念仏が、真言が、禪が、今流行しておるではないか。高遠な哲理などは、誰も必要としていない。手っ取り早い利益を願う真言宗、どんな悪いことをしても、一ぺん南無阿弥陀仏と唱えれば、極楽往生疑いなしという安易な念仏が、一切は空だ執着をはなれよという簡単な禪宗が今流行しておるのではないか、この状態をなんとみるのだ。これらの新興宗教の流行は、わね等叡山の学僧には、何ら関係のないことと断言するか、わが叡山の掟、研鏡十二年の目的は死んだ学者の言葉を記憶することか、生きた人間を濟度することか、どうだ、どうだ

弁達の声のみが大講堂に鳴り響いていた。

「弁達殿、貴僧の所論仲々に面白い、ついでには少しばかり尋ねたいが如何」

三百人の学僧を前にして大講堂に人無きが如く滔々と述べたてていた東塔の学僧弁達は、意氣正に当るべからざるの態である。

「無論のことよ、名を名乗つてから問われよつ」

「西塔の学僧蓮長、質問ではないが、示教を願う、先刻の論中に、われ等叡山の学僧連が山頂に一心三觀の月を觀じておると自惚れておる時、京、鎌倉にては真言、禪、念仏が大流行といわれたが、これを是と見るか非となすか」

「是もなく非もないわ、はやるものはやるだけよ」

「はつはつはあ……」

「なにを嘲う、無礼な奴」

怒り心頭に発した弁達、蓮長と名乗った学僧の顔を睨みつけた。

「その言葉、是非はわからぬというに似ておるので思わず失笑した。許るされよ。では、それらの教を信ずるや否や、そのご返答を伺いたい」

「信も不信もない。弁達のいう所は、天台法華宗をくだすこれらの宗旨が、日本六十六か国に充滿しておる、これに対して、叡山三千人の僧が、山上より拱手傍觀しておるのを歎いておるのじや、蓮長、わかったか」

「わからぬ」

「えつ？」

「わからぬぞ、貴僧の心中まことに解せぬ、貴僧なんのために仏飯をはんでおる。只々慨歎して、それに対して是非を論ぜず信不信も表明されぬとは、まことに道念あるに似て実は全く道心なし。すでに天台大師は法華玄義に「經文と合せば録して之を用いよ。文無く義無くんば信受すべからず」といい、開山伝教大師は法華秀句に「仏説によつて口伝を信ずるなかれ」といわれて、われ等が信不信の尺度を示されておる。また、是もなく非もないわと、うそぶいて、仏法に是非を論ぜぬとあれば、何故わが叡山の開山伝教大師が、高雄寺において、桓武天皇の御前に、三論、法相、華嚴、俱舍、成実、律の南都六宗の学者を平伏せしめて、わが叡山に大乘円頓の戒壇を建立せしめたか、如何。延暦寺円頓の戒壇こそは、仏滅後一千八百余年の長い間、印度支那一閻浮提になき靈山の八戒、日本国に始まるものである。故に伝教大師はその功を論ずれば竜樹天親にもこえ天台妙樂にも勝ぐれたる大師である。わが叡山は三塔十六谷の廣大を以つて誇るにも非ず、僧徒三千人の数をもつて他に望むにも非ず、これひとえに伝教大師が仏法の是非を正し

て、現に大乘の戒壇を建立したるが故である。しかるにこの山に住んでその末輩が仏法の是非も表明出来ず、信不信もいわれぬとは、ちと受けとり難い所論ではないか、弁達殿」

さすがの弁達も核心をつかれて、その場にへなへなと着座した。三百人の学僧は蓮長の道理ある言葉に暫し肅然たるものがあり、蓮長独り大講堂の裡に悠然と佇立していた。

「蓮長、質問」

「応う」

「東塔の学僧浄念」

名乗つて隅から座を立つたものがおる。

「貴僧のいうが如き一閻浮提第一戒壇所在のこの叡山が、何故今は昔日の面影を失い、京、鎌倉の人心より離れて、伽藍の壮大と山の曠大のみを僅かに誇らねばならぬのか、天台法華宗を念禪真言の徒輩が卑やしむ理窟は、何処より来たつたのか、所以如何に」

「城主城を破ぶるの譬がある。叡山衰微の根元は、今流行の三宗の力に非ずして、実は遠く叡山の座主それ自身が招来させたのだ」

蓮長のこの言葉は、一座を動揺させるに充分なものがあつた。

「暫く静かにきかれよ。叡山の第三祖慈覚大師は、弘法大師の真言興行の隆盛をみて、つらつら思うようは、伝教大師は唐にあること僅か一年なれば、真言を研究するの暇がなかつたのであ

ると秘かに思い、自分は唐にあること十か年、ついに真言宗は天台宗に勝れたりとの邪念を抱いて帰朝せられた。しかして伝教大師の建立せられた此の延暦寺中に、態々総持院を別に建立せられて、大目如来を本尊とせられたことは列座諸公の知るところであろう。この御本尊を前にして、善無畏三蔵の大日経の解釈にもとずき、金剛頂経の解釈七卷、蘇悉地経の解釈七卷を著述し、伝教大師が仏説によつて法華経第一也としたのに対し、これは私の意を以つて、他人の経文の解釈にもとずいて真言を第一なりとし法華経とは天地雲泥也とせられたのである。しかるに慈覚大師はこの論定を私の意ではなく、善無畏三蔵の大日経の釈に依れるもの也と思われたが、なお二宗の勝劣に不審があつたのであろうか。自分の著述を大日如来の御仏前に奉納して七日七夜祈請を営んだが、満願の夜、日輪を自ら弓を執つて射るにその箭日輪に當つて日輪転動すと夢をみて、この著述深く仏意に適うも也と覚悟して、後世伝うべしと大いに真言宗を弘めたのであつて、今日日本国に真言大流行の端をつくつたのである。しかしながら列座の諸公、よく聴かれよ

蓮長一段と声を大にして論を続けた。

「この夢によつて慈覚大師は真言は法華に勝るとされたが、内典五千七千余卷、外典三千余卷の中に、日を射ると夢をみて吉夢也とする証拠があるのであろうか。昔印度にては阿闍世大王は日の落ちるを夢にみて仏の入滅を知り、支那においては、殷の肘王は常に日を射てわが身を滅ぼ

し、また本朝においては神武天皇御東征のみぎりの故事を思えば足りる、日本国とは天照大神の日天にまします故である。日輪を射る夢が果たして吉夢であろうか。この道理を学僧三百人の中に破するもの一人でもあるであろうか……」

三

「蓮長つだまれっ」

三百人の学僧、黙念としてさしも広い大講堂、人無きが如くであつたが、突然怒気を含んだ声が爆発した。

「だまれだまれだまれ、汝がいう如く、先師慈覚大師の日輪を射るといふ夢はたとえ凶夢なりとしても、慈覚大師は直々に伝教大師にあい奉つて、相伝を受けた尊いお方である。しかるに汝は四百余年の後に生れて勿体なくも慈覚大師を云々する資格がおるか」

「……ならば尋ねるぞ。慈覚大師の口伝真実ならば、伝教大師の御釈は無用と言うか。汝は経文をすてて四依の菩薩につくと断言するか、父母の譲り状をすてて口伝を用うべきか否や」

名も名乗らず、ただうっ憤晴らしに放つた一言とみえ、蓮長の反問に答える声はなかった。

「かくて慈覚大師は法華に勝るとして、この叡山に真言宗を許されたのである。弘法の門下が真

言宗は法華經に勝ると立てたならば、わが叡山こそ強敵であつたらうになんたることか、座主自身が叡山三千人の僧侶の口をふさいで、仏教にもよらず、又開山伝教大師の釈にもよらず凶夢を根元にして、真言は法華經に勝ると立てられたのである。而してその後を受けて四祖となつた智証大師は、慈覚大師の論を更に進め、即ち慈覚が理同事別の論を進めて理同事勝を主張し、はつきりと真言宗は天台宗に勝ると論断されて、今の三井寺に天台喜言を創立せられたのである。思うに、念禅真言等の三宗が、印度、支那、朝鮮なぞの余国において弘まるならば、敢て不思議とはこの蓮長もせぬ。しかるに此等の三宗が今堂々と流行しておると、諸兄等は騒ぎ立てて今日この大講堂の論義を湧きたたせたが、既に諸兄も先刻承知の如く、開山伝教大師が南都六宗の僧侶を、法華經の最爲第一の經文をもつて、これを帰伏せしめて以来、わが叡山は日本仏法の中心となつたのである。故に、わが叡山の僧侶達が賛成しない限り、念仏も喜言も禅宗も、わが日本國に弘まる道理がないのである。しかるに上一人より下万民に至るまで、真言宗は天台宗に勝ぐれたり、と思わしめたものは、なんぞはからん、叡山の慈智両大師ではなかつたか、論破いかに：つぎに禅宗流行の根元心悲しいかな、またこの叡山にあるではないか、即ち、叡山第一の古徳安然和尚は、教時浄論に、第一真言、第二禅宗、第三天台法華宗、第四華嚴宗等々と書かれた。叡山以外の処よりこの論が出たのであれば、何人も一顧の価値を認めないであつたらうが、いやしくも仏法の中心地仏教の最高学府たる叡山の先輩と仰がれる人が、宣言、禅が法華經よりすぐ

れたりと認めたのである、禪宗が日本国に充滿するも道理ではないか……」

「待てつ蓮長、汝は気安くもわが叡山の先師慈覚大師、智証大師、古徳安然和尚の故事を引いて、人もなげにこれを論難す。僧の本分にもとるぞ、先師先輩に対する礼を失しておるわい。畢竟汝が信の足らざる証拠じゃ。学問の道場たるこの大講堂の裡じゃから、自由な言論も暫く許さう、だが学を励むもよいが、僧の本領たる信を忘れるな」

「如何にも、信こそわれ等の根本、仏に對する信こそ蓮長をして斯く言わしむるということを知らぬか。しからば貴僧は慈覚大師、智証大師、安然和尚は釈迦多宝十方の諸仏より勝れたりとするか、どうじゃ。いま日本国王より民一人にいたるまで、仏の御子であろう。その仏最後のご遺言に、法に依つて人に依らざれと戒められておる。法華經を第一となすは法によるのであつて、蓮長の言葉ではないわ、開山伝教大師も、その御遺戒を守つて、法華最第一となして、この叡山に自ら書写の法華經を埋めて一乗止観院、われ等が延暦寺を建立せられたのである。慈智両大師安然和尚を、開山伝教大師よりもすぐれ、釈迦多宝十方の諸仏よりも勝れりと思う道念の僧侶がこの大講堂の裡に席をしめるとは、近頃面白いことよ、名を名乗れ、大講堂論議の掟じゃ、いずれにおるか、その御僧侶」

無論名乗りを上げる程の学僧ではなかつたとみえて、蓮長の言葉のみ大講堂の裡にびんびんとこだましていた。

うす暗くなつた室内、悠然と立つ蓮長、心あるものには、開山伝教彷彿と此処に來たつて、叡山の雜亂をなげくかに思えた。

「さて、五十年この方の念仏宗の流行を学僧諸君はなんとみるか。釈迦の指を切つて弥陀の木像に変えるのが近頃寺々の流行じや。京、鎌倉は無論のこと、日本六十六か国辺土にいたるまで、弥陀三尊を祭の念仏の声のみあつて余宗は有つて無きが如き状態、この根元もあさましいかな、わが叡山よりこと起つておるではないか、叡山十九代の座主良源慈慧大師がその緒をなした。座主良源は与えて言えば慈智両大師の真言雜亂を正して教学を一変し、開山伝教大師本来の法華經中心の正系に復したとは言えるが、奪つて言えば、天台大師の真意を汲みとれず却つて念仏法門の登場を促した。即ち座主良源の弟子慧心僧都はその志をついで、往生要集を著述して、大いに念仏の義を唱えたのである。

しかるに往生要集世に現われて二百十四年後の建久九年、叡山に学んだ後輩の僧たる法然が、慧心僧都を自らの先輩として、更にその往生要集を基として選択集一卷をつくつて、浄土宗一門の要書となしたのである。これに依つて浄土宗の念仏一世を風靡し称名念仏の声は都鄙に遍ねく、余宗は拱手傍觀のていたらくではなかつたか。この時にあたつて、わが叡山の僧侶は何をしたか。仏法の道理をもつて、南都六宗の僧侶を帰伏せしめたる伝教大師のこの叡山にすむ学僧達が、邪正の対決を法然に迫ること一度もなく、今を去る十九年前の嘉録二年六月、法然の死後十

四年、叡山の威勢をもって勅を強請して、法然の墓を大谷に破却し、死骸を鴨川に流して快哉を叫び、選択集の印板を、今諸兄等が蝟集しておるこの大講堂の前において焼き捨てたのではなかったか。この暴力によって念仏は鳴りをひそめたが、耳をすませばわが叡山すら、その念仏の声が聞える。大講堂三百の学僧その声が聞えぬと言うのか」

満堂寂として声なく、蓮長の頬に、涙が、一筋二筋きらきら光っていた。